



ヒメプラをぶらぶら

拠点レポート

本社、関東、阪神、岡山、福岡の各支店、さらに姫路産業資材営業部、NET販売部をぶらぶら探索。そこには、頑張る人、支える人、何でも話せる仲間などさまざまな笑顔がありました。各拠点のホープがご案内します。



今があるのは――

たゆまぬ努力の積み重ねが ヒメプラの土台となった

●1972年(昭和47)8月発行 社内報「躍動」より

「ヒメプラの生いたち」

村角 富男

…私がセキスイを知るようになった昭和二十八年頃は、まだまだプラスチックは世の中で認められておらず、セキスイも苦難の道を歩んでいた頃であったが、彼等には近い将来における勝利の確信が満ちあふれていたのである。…(略)…

ある日、梅田阪急の屋上へ上ったところ金魚を売っておったので、ちょうど生まれたばかりの長女のみやげにと思って注文した。その頃容器はカンヅメの空缶だったので、持ち合せの見本のポリ袋に入れてもらうようだのんだったのである。…すなわちこの袋にヒモをつけたら空缶よりはるかにお客に喜ばれるものになる。すぐ作って納めてくれということになり、袋の手配、ヒモの手配をして、加工は当時住んでいた神戸六甲道のアパートで私と家内でやることになった。

昼間は各会社廻りをやり、夜はポリ袋の加工をしながら一生懸命やったが、依然として採算に合う事業とは認めてもらえず、会社からの積極的な支援を得られぬまま再び数ヶ月を経てしまった。…(略)…

その頃ようやく品種が増えてきた家庭用品の砂糖つぼ各サイズ、醤油さし大小、その他丸形、角形のケース類などを中心に小売店、百貨店への売り込みを開始、一方では金魚袋を売りながら、食品包装業界への売り込みを行って、本格的なスタートを切ったのである。

